

すず き ゆ み こ  
鈴 木 由美子

学位の種類 教育学博士  
学位記番号 教博第28号  
学位授与年月日 平成3年6月26日  
学位授与の要件 学位規則第5条第1項該当  
研究科・専攻 東北大学大学院教育学研究科(博士課程後期3年の課程)  
教育学専攻  
学位論文題目 ペスタロッチーにおける幼児教育思想の成立過程に関する研究  
論文審査委員 (主査)  
教授 松井一麿 教授 木村力雄  
教授 千葉泰爾

論文内容の要旨

1. 本論文では、近代教育学の確立に大きく貢献したペスタロッチー (J. H. Pestalozzi, 1746-1827) の幼児教育思想を、母性観の深化・発展を基軸にして、その内容と社会的意義を解明するとともに、幼児教育思想の本質的課題を新しい視点から解明しようとしたものである。
2. 論文の構成は次の通りである。

序章 研究目的と方法

第1節 研究目的と設定理由

第2節 先行研究の分析と方法

第1章 ペスタロッチーにおける発達思想の形成と幼児教育への関心

第1節 ペスタロッチーの幼児教育思想にみる発達思想の形成

1. 幼児教育思想における母親と子どもとの関係
2. 幼児教育における母性愛重視の時代的背景
3. 幼児教育における母性愛の役割
  - (1) 「直観」と言語とによる幼児の知的独立の援助
  - (2) 道徳的自立における危機点と母性愛の役割

4. ペスタロッチーにおける幼児理解の問題
- 第2節 ペスタロッチーにおける母性観の深化と幼児理解との関連
1. ペスタロッチーにおける母性観の発展
  2. 『世間の女性と母親』における母親批判
- 第2章 ペスタロッチーの発達思想にみる教育問題と経済問題との接点  
—— 幼児教育思想の基本的課題 ——
- 第1節 ペスタロッチーにおける発達思想の弁証法的構造
1. 進歩史観と教育学
  2. 「進歩の思想」と人間の発達への関心
  3. 発達の法則性に関するペスタロッチーの見解
    - (1) 歴史の進歩と人間の発達との統一的把握
    - (2) 内的な発達法則への関心
  4. 発達の原動力としての自己克服の論理
- 第2節 弁証法的発達観を克服する論理としての〈社会的人間〉の形成
1. 弁証法的発達観と〈社会的人間〉の形成
  2. 所有を基軸とした歴史見解
    - (1) 発達史的歴史観にもとづく所有観
    - (2) 社会的不平等解消の手段としての〈社会的人間〉の形成
  3. 自己克服力の育成の歴史的意義と問題
- 第3章 近代資本主義の発展がもたらす教育学的課題に対するペスタロッチーの立場  
—— 女性の家庭外労働の増加と幼児教育思想の深化 ——
- 第1節 スイスにおける近代資本主義の進展と中産階級への注目
1. 経済的関心と教育問題との接点
  2. スイスにおける機械工業の発展（1798年－1848年）
  3. ペスタロッチーにおける中産階級の理解
- 第2節 スイスにおける近代化の課題と〈プロテスタンティズムの倫理〉
1. チューリヒにおける宗教改革とペスタロッチー
  2. 『リーンハルトとゲルトルート』にみられる国家財政の基礎としての個人の節制の重視
  3. 『リーンハルトとゲルトルート』にみられる「神」と「富」との分離
  4. 宗教改革による「職業観念」の帰結とペスタロッチー教育学への影響
- 第3節 経済観から教育学へ
1. 道徳・宗教教育の法則化への関心
  2. 重農主義的見解からみたノイホーフ貧民学校の経営理念

3. ノイホーフ貧民学校における道德教育の課題
  - (1) 「労働力」としての人間と「労働者」としての人間
  - (2) 労働者教育への「宗教的なもの」の導入

#### 第4節 労働者教育の徹底から生じる母性観の二面性

### 結章 ペスタロッチーの幼児教育思想における個人と社会との問題

#### 第1節 母性観の二面性にみる近代的個人の独立の問題

1. 母性観の二面性を統一する視点
2. 幼児教育における母親の重視の理念と現実の状況
3. キンダーハウス構想にみられる子どもの権利の思想
  - (1) 女子教育思想と婦人労働の積極的評価
  - (2) キンダーハウス構想にみられる子どもの発達権の重視
4. 近代的個人の独立への志向と共同体の模索

#### 第2節 近代的個人の独立の確保と共同体再編成の課題

1. 18世紀スイスにおける時代的課題
2. スイスにおける階級構成の変化と「愛」への注目
  - (1) 弁証法的人間観
  - (2) 共同体を結合する原理としての愛
3. 愛の発達法則と母親への注目
4. 新たな従属関係への転換

3. ペスタロッチーの幼児教育思想は、母親と子どもとの関係を核とする家庭教育に重点を置いて構築されているというのが、ペスタロッチー研究のこれまでの成果であるといえよう。論者はこの見解に対し、母親と子どもとの関係にペスタロッチー教育学の核心をみいだす点では同意しながらも、母性観を社会的関係のなかで検討する必要性を指摘する。論者は、近年アリエス（Ph. Aries）らの研究によって世界的に注目を集めている社会史的研究の成果から、母性愛が近代の産物であることを確認し、特に20世紀後半になって新たに公表された多くの経済に関する論文を含むペスタロッチーの後期の著作、論文を詳細に検討することにより、ペスタロッチーにおける母性観がフランス革命・スイス革命の進展ならびにスイスにおける資本主義経済の進展と深く関連していることを指摘する。

ここで論者は、近代資本主義の進展過程におけるプロテスタンティズムの精神的影響に着目し、それが母性観の形成・変容に齎らす作用から、特にスイスにおける資本主義経済の進展と母性観の深化・発展との関連を解明する必要性を指摘する。ペスタロッチーにおける母性観の深化・発展はまたその幼児教育思想の成立過程をも示している。

このことに着目する限り、論者は、「個人」の陶冶の根源をなすとみる「自然」に基く個人の高貴化としての道德・宗教教育の闡明と、それに対する政治的経済的諸関係の解明を射程に入れ

た視野に立っている。ここから論者は、本論文の主題を、ペスタロッチーの幼児教育思想の成立過程を特に政治的経済的側面から解明すること、及びそれを通して、幼児教育思想の本質的課題を解明すること、にあると論定する。

第1章において、幼児教育思想における母性愛の重視が、ペスタロッチーの幼児教育思想の基本的特徴であること、ペスタロッチーの母性観が、社会変動のなかで深化・発展していることが指摘される。

まず、母性愛の重視が、後期著作の詳細な検討により、ペスタロッチーの生涯を貫く視点であることが確認され、次に、それぞれの時代に対応したペスタロッチーの母性観を検討することにより、彼の母性観が、フランス革命の影響・資本主義経済の進展といった社会変動のなかで、本能的母性愛の重視から「思慮ある愛」としての母性愛の重視への深化・発展していることが指摘される。

ペスタロッチーの母性観の深化・発展の契機を彼の母親批判にみる論者は、批判が、外見上母性愛が過剰である母親にも母性愛が欠如している母親にも「愛のなさ」という点では同じであるとして、向けられているだけではなく、そのような母親を生みだしたスイスの社会状況にも向けられていることに注目し、ペスタロッチーの幼児教育思想を社会的課題との関連において解明する必要性を指摘する。

第2章においては、18・19世紀の啓蒙主義の思潮である「進歩的思想」とペスタロッチーの発達思想との比較・検討により、ペスタロッチーの教育学的課題としての「社会的人間」の形成の視点が指摘され、そのための方法論についての論及が行なわれる。

論者は、啓蒙主義のひとつの特徴としての進歩史観から導き出される人間形成の課題として、社会・歴史の進歩と人間それ自体の進歩とを統一的に把握する必要性をあげ、これがペスタロッチーにおいて、彼独自の道徳的・内在的キリスト教信仰受容に基く「イミタティオ・クリスティ」(imitatio christi)の実践としての「いのちがけの跳躍」を通して獲得される「自己克服力」の形成として示されていることを指摘し、ルソーの発達思想との比較からこの点にペスタロッチーの幼児教育思想の基本的特質があると論定している。

さらに論者は、ペスタロッチーの歴史観が所有を中心にして展開され、そのために彼が社会体制の必然性を認識している点から、人間形成の課題としての「自己克服力」の形成が、教育学的課題としては、社会との関連を含んだ「社会的人間」の育成として示されていることを指摘する。ここで指摘された「社会的人間」の育成は、究極的な教育学的課題であるのみならず、同時にそれを可能にすべき近代の政治経済的課題でもあることを展望しつつ、論者は、ペスタロッチーにおける幼児教育思想が、近代の政治的経済的課題の克服のための論理でもあると論述する。

第3章においては、ペスタロッチーの女子学校の理念ならびに就学前教育施設構想の成立過程が、18世紀スイスにおける経済変動ならびに階級構成の変化に関する詳細な資料にもとづいて解明される。

論者は、スイス機械工業の進展ならびにそれによる中産階層（Mittelstand）の分化を、スイスの原資料を駆使することによって明らかにする。中産階層が中産階級と労働者階級とに分化しつつある時代状況のなかで、ペスタロッチーは「中産階層の再興」を重視するが、論者は、ペスタロッチーの名著『リーンハルトとゲルトルート』第1版と第3版の綿密な分析から、ペスタロッチーが、1820年代においては中産階層のなかでも特に中産階級の社会的諸力に注目していることを指摘する。

中産階級の社会的諸力との関連で、プロテスタンティズムの精神的影響に着目した論者は、ノイホーフ貧民学校でのペスタロッチーの教育実践を検討することにより、ペスタロッチーの教育思想の根底に、近代資本主義の肯定とそれに適応する人間形成の課題、ならびにそのための宗教教育の必要性という観点が存在することを指摘する。ペスタロッチーの思想の脈絡に所以を訊ねるならば、「さまよう人類」の「最も近い関係」にある神が「父なり」と呼ぶ声を聴き、子として留まり、隣人愛をひたすら実践することこそ教育の努力はかかっており、その手引は家庭においてなされる他はない。

この観点から母親と子どもとの関係が重視され、父親に先だって、幼児の宗教教育の役割までも担うに至る母親像が、ペスタロッチーによって描かれる必然性を指摘する。論者は、また、プロテスタンティズムの倫理が社会的作用として家父長制を強化する作用をもっていたことから、ペスタロッチーの母性観にも家父長制的性格が認められることを指摘する。しかし、同時に、ペスタロッチーの目は、家父長制的家族そのものが、父親のみならず母親をも家庭外労働に追いやる資本主義の進展により、根底から揺すぶられていた現実にも向けられ、彼がいま一つの母性観を抱くに至っていたと論者はみている。しかし、女子学校の目的ならびに就学前教育施設構想にみられる女性の家庭労働を肯定する見解と家父長制的家族内の母性観との関連構造を解明する必要性を指摘する。

幼児教育思想における母性観のこうした二面性を、母性愛を肯定するペスタロッチーの論理にしたがって検討した結果、論者は、ペスタロッチーが母性愛を基調とした就学前教育施設を構想することにより両者を統一的に把握し、この統一の視点に時代的課題を克服する論理が秘められていたと論定する。

結章においては、これまで展開されてきたペスタロッチーの幼児教育思想の二面性の意味が主として政治的経済的側面から解明される。

まず、女子学校設立の目的と内容ならびに就学前教育施設であるキンダーハウスの目的と内容が検討され、母性愛の重視と施設保育とを統一する視点として、近代的個人の育成の問題があげられる。スイスにおける社会状況の分析から、論者は、ペスタロッチーの基本的課題が、近代的個人の育成ならびに近代的個人の独立を確保しうる共同体の模索にあると指摘する。ペスタロッチーにおける個人と社会との関係認識をヘーゲル、ルソーと比較しながら、論者はペスタロッチーの特質として、個人を中心としながら、個人に内在する個人と社会との矛盾の止揚を志向してい

る点にみいだすのである。この結果、ペスタロッチーの課題は、原理的個人としての人間観の創出と、原理的個人によって構成される共同体像の提示として示されることになる。

論者は、ペスタロッチーの『人類の発展における自然の歩みについてのわたしの探求』を吟味することによって弁証法的人間観を、『わが時代とわが祖国の純真・誠意ならびに高潔な精神に訴える』を吟味することによって、愛によって結合する新しい共同体像を提出する。ここから論者は、ペスタロッチーの幼児教育思想の本質的課題が愛の形成にあること、この意味での愛の形成が、近代市民社会に生きる人間に内在する個人と社会との矛盾を止揚する点にあることを論定する。

以上を要約すれば、ペスタロッチーにおける幼児教育思想の成立過程は、近代市民社会に生きる個人に内在する個人と社会との矛盾を止揚することにより、近代市民社会の成立と発展を現実的に支えるための教育理論を構築する過程であった。論者は、ペスタロッチーにおける幼児教育思想の本質的課題が、母性愛によって近代市民社会に生きる個人に内在する、個人と社会との矛盾を止揚する点にあることを指摘して、論述を結んでいる。

## 論文審査結果の要旨

本論文のねらいは、ペスタロッチーの幼児教育思想の成立過程を、母性観の深化・発展を中心に、政治的経済的課題との関連において明らかにし、幼児教育思想の本質的課題を解明する点に置かれている。

論者は、従来のペスタロッチー研究における母性観のとりあげ方がその著作中心に行なわれているため、母性観の肯定的な評価に偏っており、その思想的発展過程ならびに社会的意味の検討が、等閑に付されている点を指摘している。論者はこのような従来の方法を吟味批判した上で、独自の方法を採ることによっていくつかの新しい成果を挙げている。すなわち、ペスタロッチーの母性観を時代的背景との関連において検証することにより、ペスタロッチーが母性観を深化・発展させざるを得なかった必然性を明らかにし、ペスタロッチーの幼児教育思想を政治的経済的課題意識との関連で捉える視点を明らかにしている。

ペスタロッチーが、フランス革命・スイス革命によって思想的影響を受けただけでなく、また実際にそれに参画していること、またノイホーフ貧民学校を経営することによって、資本主義的経済の問題と対決せざるを得ない状況に置かれていたことなどを考えれば、この考察方法は、ペスタロッチーの幼児教育思想を全体的に捉える上で適切であり、独創的である。特に第3章において、わが国での入手が困難な原資料を駆使して、スイスの経済構造の変化ならびに階級構成の変化を明確にし、上記の方法による論述を、ペスタロッチーの後期教育思想においても徹底している点は、わが国におけるペスタロッチー研究に対して新たな知見を加えたものとして高く評価できる。

このような方法をとることによって、論者はペスタロッチーの幼児教育思想を従来の研究とは異

なった角度から広く捉えることができたし、なお追求すべき貴重な視点をも捉えている。しかし、いくつかの不備や未熟な点が見られる。たとえば第2章におけるペスタロッチーにおける「神」理解は、確かにペスタロッチー自身の、内在的宗教性に敢えて留まろうとするが如き、実践的なキリスト教受容が浮かび出ており、その点で、道徳・宗教教育の一貫性も主張されているのであるが、それ故に母理解ならびに発達思想への注目と密接につながっている筈である。しかしこのような道徳的内在的宗教性における愛において、近代社会における原理的個人の形成する共同体が、どのような結合の構造を可能にするのか。弁証法的人間観において、個人は善なるものとしてではあってもあくまでも個人に留まらざるを得ないが、原理的個人において、社会的諸矛盾がこの弁証法的人間観によって止揚し得るのか。特にキリスト教信仰との関連においてこの点をより綿密に吟味することにより、ペスタロッチーの幼児教育思想をいっそう構造的に把握できたのではないだろうか。論者が、宗教的側面にも着目しているだけにこの点の不備が惜しまれる。

また第3章におけるプロテスタンティズムの把握についていえば、チューリヒのプロテスタンティズムの特質とペスタロッチーの宗教観との関連が論述されているが、必ずしも充分であるとはいえない。確かにペスタロッチーにとって教派・教理の理論的相違は関心の薄いものであったであろう。にも拘らず、彼の宗教性にとってツウィングリの合理性や実践性、あるいはツウィングリとルター、カルヴァンとの相違、ならびにスイス・プロテスタンティズムとドイツ・プロテスタンティズムとの比較によって、いっそうペスタロッチーの宗教観の特質を掘りさげていくことも望まれるところである。

こうした不備や未熟な点にもかかわらず、本論文は、先行研究の成果を十分にふまえて、ペスタロッチーの後期の著作や論文、ならびにわが国では入手困難な原資料を詳細に検討して、時代状況との関連においてペスタロッチーの幼児教育思想の成立過程を明らかにするとともに、新しい視点からペスタロッチーの幼児教育思想の本質的課題を解明した点において高く評価できる。

よって教育学博士の学位を授与することを適当と認める。